

## 平成 23 年度愛媛大学大学院入学式式辞

本日ここに平成 23 年度入学式を挙げるにあたり、愛媛大学を代表して皆さんの大学院への入学を、心から歓迎いたします。

この大学院入学式のために、ご臨席を賜りましたご来賓、ご家族をはじめ、関係の皆さまに、深く感謝申し上げます。

今年度、愛媛大学大学院に入学された方々は、大学院博士課程では、医学系研究科博士課程と理工学研究科博士後期課程に 48 名、大学院修士課程では、法文学研究科、教育学研究科、医学系研究科、理工学研究科博士前期課程及び農学研究科に 454 名の皆さんであります。この他に、愛媛大学には、香川大学、高知大学と共に構成する博士課程の連合農学研究科がありますが、来る 4 月 11 日に入学式を行い、23 名を迎えることになっています。

皆さんの中には 52 名の社会人学生、16 名の海外からの留学生が含まれています。これらの方々は学業以外の面においても多くのご苦労があることと思います。困難をいとわず学問に挑む皆さんの高い志をたたえるとともに、試練を乗り越えて、所期の目的・目標を達成されることを願っています。

社会は今、新しい知の創造や新しい技術の開発のために、若い知識人や研究者、高度の専門職業人が数多く輩出されることを期待しています。愛媛大学大学院に入学された皆さんがこの社会的な使命を自覚し、高い志をもって学修と研究に励み、優れた専門職業人あるいは研究者として成長されるよう祈念いたします。

愛媛大学の各研究科においては、大学院課程のカリキュラムの改革が行われています。修士課程においては、修士論文作成のための勉強だけでなく、広い分野の基礎的な知識や技術を修得するためのコースワークが導入されています。広い知識基盤のもとに、専門領域の最先端の諸課題を理解し、その学術的な位置づけと動向を把握することが必要です。また、共同作業や集団的な議論の中で、人の意見を理解し、自分の意見を述べられるようになること、そして、自分の研究テーマを遂行するために、自ら学修し、必要とあらばどこにでも出かけて教を乞い、自分の研究能力を高めることが必要です。

博士課程においては、将来、大学や企業などの研究機関において研究者として活躍することが期待されます。そのためには、自分の目標をもつこと、しかも大きな目標をもつことが大事です。そして、その目標を実現するために、着実に徹底した日々の研鑽が必要です。これからの社会においては、専門知識や技術は細分化された狭い領域で、ますます高度化し先鋭化していきます。どのような研究機関においても、深い専門性が必要とされます。しかし他方では、専門を深めれば深めるほど、単独では役に立たなくなります。知識が高度化した社会においては、いかに優れた専門職業人や研究者といえども、一人でできることは限られています。もっとも大切なことは、人と共同してチームをつくり、チームの中で互いの意見を闘わせながら一人ひとりが持っているものとは違う新しい次元の知を創り出すことです。

修士課程であっても博士課程であっても、自分の専門を究める過程で大切なのは、「人と良好な関係を築くことができる能力」や「人と協力しながら物事を成し遂げる能力」などの社会的な能力です。これらの能力の中には、コミュニケーション力や協調性やリーダーシップなども含まれます。このような社会的な能力は、実社会に出たときに必要なだけでなく、自分の研究レベルを高めるためにも必要です。皆さんはすでに何度も経験していると思いますが、自分で理解しているつもりでも、人と議論を交わしたり発表したりした時に実はあやふやな理解しかしていなかったことに気付くことがあります。自分の理解を深めたり、新しい発想を得たりするためには、人との意見交換や議論が不可欠です。そのような意味において、研究は個人的な営みであると同時に、すぐれて共同的な作業でもあります。皆さんはそのような機会をなるべく多くもつために、研究室やゼミでの発表や討論、あるいは学内外での交流、国内外での学会発表などに積極的に取り組んでいただきたいと思います。

さて、今回の東日本大震災では地震、津波、原発事故が同時発生して、未曾有の被害をもたらしました。この大震災は、想像を絶する自然の破壊力を見せつけただけでなく、先進的な科学技術に依存している現代の産業社会システムの本質的な弱点をあらわにしました。たとえば、近年、地球温暖化防止やエネルギー安全保障への対応策として、原子力発電が見直され、世界各地で原子力発電所の建設計画の動きがあります。この動きを関係者は原子力カルネサンス（原子力の復権）と言っていますが、福島原発の事故により日本および世界のこれからのエネルギー政策について抜本的な見直しが迫られるのは必至です。また、多数の部品からできている工業製品に関する高度な分業生産システムの脆弱さもあらわになりました。震災によって一部の部品工場が操業できなくなったため、その部品が調達できなくなり車などの製品が長期間製造できなくなるという事態が生じました。

また、この大震災は、人がしばしば陥る「認識の固定化」がいかに危険であるかという教訓も残しました。愛媛大学防災情報研究センターの鳥居センター長は新聞インタビューの中で、今回の大震災の人的被害がきわめて大きくなった原因のひとつとして「災害イメージの固定化」を挙げています。三陸地域は過去の津波のデータが豊富にあり、防災訓練もよく行われ防災意識がきわめて高かった地域です。しかし、津波の規模や範囲を固定化して認識してしまい、結果的に逃げ遅れたことが被害の拡大につながった可能性があるとして述べています。同様のことは、原発施設の強度や防潮堤の高さなどにも当てはまります。マグニチュード 9.0 の地震規模、10 メートルを超える津波。これに対して関係者はこぞって「想定外」と答えました。これもいわば「認識の固定化」のひとつです。

「認識の固定化」とは、設定された前提を疑わずに絶対視することだと言い換えることもできます。これは皆さんのこれからの研究現場においても常に起こり得ることです。どの研究分野であっても、すでに構築された「知識の体系」が存在します。既存の「知識の体系」は自分の思考を深めるのに大いに役立ちます。しかしその反面、思考を硬直化させる「常識の壁」にもなります。創造性のある研究を進めるためには、この「常識の壁」を打ち破る柔軟で挑戦的な発想が求められます。時には、非常識と罵られたり異端と呼ばれたりするかも

しれませんが、それを恐れてはなりません。

今回の大震災によって、これまでのエネルギー政策や人々の生活のあり方や価値観は根本的な見直しを迫られ、日本の社会システム・経済システムの一大転機になるのは間違いありません。このような転換期において、今回、大学院に入学された皆さんが、常識に囚われない柔軟な発想で時代を切り拓く人材になることを心から願い、私の式辞といたします。

平成 23 年 4 月 6 日 愛媛大学長 柳澤康信